

朝鮮黃海道鐵嶺山は明治四十三年農商務省の有に歸して以來、年々二萬噸乃至七萬噸の鑛石を産し、既に百萬噸の鑛石を産出せり。

地質は上部大同層にして白堊紀(?)の凝灰質を帶べる頁岩砂岩、礫岩及凝灰岩より成り中に扁桃狀の石灰岩を夾在す。石灰岩の上下の頁岩中には植物化石を産す。本層の走向は東西乃至北東、傾斜北方へ平均四十度なり。本層は鐵山の南方一里に於て古生代堆岩及雲母粘板岩を不整合に被覆し、又西方には黑雲母花崗岩の大塊あり、大同層は此の花崗岩の一部の噴出に際し沈澱したる凝灰質岩石ならん、而して又花崗岩の一部は大同層の沈澱後に進入し此に交代作用を及ぼしたるものなり。猶ほ花崗岩進入に伴ひ之より分化射出せる玢岩狀岩脈の貫入せるものあり。

鐵嶺の産出狀態 鐵嶺產地は鐵嶺山、同蛤坑、同筐山、南栗面泰金山、牛頭川面黃山洞、同未力街上小串の六箇所に於て何れも大同層を母岩とし花崗岩に近く排列す。鐵嶺は多く褐鐵礦なれども時に蛤坑に於ける如く雲母鐵礦として産す。鐵石の形狀狀態に次の四種あり、一、重晶石を伴ひ腎狀又は。縞狀構造をなすもの、二、重晶石を伴はず、不規則塊狀をなすもの、三、大小礫狀をなすもの、四、表土中に礫狀をなすもの。

鐵床の成因 大同層中の石灰岩が南西方に隣接せる花崗岩の進入に伴ひ分化進出せる玢岩岩脈に貫かれし際並に其の後此の花崗岩岩漿水より浸出せる多量の含鐵鐵液の爲めに交代

作用を受けて生ぜるものなり、其の結果多量の赤鐵礦及び菱鐵礦を生じ更にその後の露天化作用に依り二次的に褐鐵礦を生じ大鐵床を形成せるものなり。鐵床母岩をなす石灰岩は特に鐵分を多く含有するものにはあらず、故に鐵床をなす褐鐵礦が單に石灰岩の風化により凝聚せるものと考ふるを得ず。鐵嶺の鐵礦は隣接せる花崗岩の岩漿より直接間接に鐵液の供給を受けて交代的に生成せるものなり。

從來鐵嶺及び安岳の鐵礦は鐵層を爲し水成岩と共に沈澱せるものなりとされたるを本論文にて交代鐵床なりと論ぜるものなり。(中村)

新著紹介

○支那研究 西湖より包頭まで 藤田元春著 四六版本

文四二三頁 大阪博多成象堂發行 大正十五年五月

定價貳圓七〇錢

鶴岡藤田君は素から支那歴史地理學の専攻家である。大正十三年八月から十月にかけて二箇月間外務省の命を奉じて楊子江、京漢線、汴洛線、京綏線、北部津浦線、山東線及南滿洲を急いで旅した紀行に托して、其の路線の歴史地理と地學的觀察を詳記したものである。其の歴史地理を説き、人文を論ずること、かいなでの旅行家の考へも及ばぬ位犀利なものがある。之は年來の蘊蓄が迸り出たからである。地學家の紀

行の出版されることが甚だ寥々たる時流には山崎博士の西洋又南洋あり、今鶴岡氏の支那紀行があつて併せて世界紀行が完成された観がある。本書の最も特異とする所は水系殊に黄河の源支、舊流については疾走する車内に在つても數米の細流を見のがさずして一々其に地學上將た歴史上の釋明を加へた所にある。勢力絶倫の地學者でなければかうも觀察眼を不斷に開いて居ることは出来ない。獨り本書が支那地誌に關し大なる貢獻をしたばかりでなく、人文に關した經驗を肩の凝らぬ筆で織り込んだことは著者の性格の然らしむる所か或は文才の然らしむる所かは知らないが、さもなく本書の歷卷は洛陽に中華現代の怪傑樊佩孚を訪うて其客となり、老酒の饗を享け、「周禮が支那の靈法だ」と講釋されて感服してつた一章である。本書には寫眞と地圖との挿圖が百二十七も入つて居ることは地理學書としてよく其の體を具へたものと云へる。たゞ惜むらくは各種の數字に途方もない誤植の甚だ多いことであるがこれは讀む人をして誤らしめ程判り切つた瑕であるから却つて愛嬌になることも言へる。紹介者は本書を地學愛好家は勿論一般江湖に薦めるに吝かならぬものである。(N)

○鑛物岩石鑑定要覽

大橋良一著 東京市神田區南神保町九番地太陽堂發行 幅四寸、長六寸、八十七頁小冊

子・定價金壹圓貳拾錢 大正十五年六月發行

此種の書冊に最も痛切に要求せらるるは、使用や携帶に便で、鑑定に適切な特徴や要點が、或るべく簡潔に洩れなく簡

羅せられて、ムダの無い事である。著者は其序文に記載せる通り、深く此點に意を注いで、苦心編纂したもので、鑛物の鑑別に往々見誤り易い光澤に重きを置かず、硬さによりて分類したのは、新機軸を發揮したもので、著者多年教授の經驗から得た貴い果實である、又鑛物の種類を重要なもの百二種に限つたのも、前記の主旨から善く會得が出来、鑛物の本邦名と英名とを表の兩端に置たのは、氣が利いて居る。屈折率や劈開、比重、熔融度を各別に表示し、鑽石一覽に主要成分の含有量や、鑛床を表示したなど、克く要領を得て簡便である、主要造岩鑛物や岩石鑑定表にも著者の苦心と創見が歴々窺はる、此書の實用上大に役に立つのに驚喜する人々は、僅々百頁に満たぬ小冊子中、鑛物、岩石、鑽石に關する重要な諸性質を巧に纏め込んだ著者の勞を深謝せねばならぬ(愛石生)

○大阪府郷土地理

藤本好著 菊版一七頁 網目寫眞

版十葉 地圖二葉 大正十五年四月發行 大阪市東成區

生野國分町宮田操泉堂 定價一圓

本書は中等學校の地理科の參考書として編纂されたものである。然し其の内容を見るに克く近代の地理學の趣向に鑑みて自然地理より人文地理に互つて其の相關の理を明にして居る。且つ間々歴史地理に互つて現代の地理のよつて来る所を明にして居る。地理學の面白味の最も多いのは郷土地理である。殊に日本第一の商工業都市大阪を中心とした大阪府の地理現象の影響する所は無論大阪府に限られて居らず、日本全

部若くは東亞に及んで居る。紹介者はこの外形の教科書らしい地理書から幾多の新しい地理的説明を見出して莞爾として之を江湖に薦めて我が大阪の地理が國民に理解されるのを望むのである。之を教科書に用ひても他の教科書の様に説明を補ふ事は餘程力量がいる様にも思はれる。それは此の書の説明が地理學的の正確さと綾々十二分に持つてゐるからである。若し夫れ行文のミツかに關東人の眼を遮ざる點のあるに至つてはそれが郷土の地方色を持つて居ることを示して居るといふ點で面白く感ぜらるゝ所である。小川博士の本書の序文に言はれて居る様に同種の冊子が各府縣から出る嚆矢となつて全國地理教育界の新風潮を起すことを望むこと切である。(N)

Stieler's Atlas of Modern Geography

(Tenth-Century-Edition) 254 Maps & insets on
108 Sheets 2 Volumes. Justus Perthes: Gotha.
Completely revised & largely redrawn under the
direction of Prof. Dr. H. Haack, 55yen.

Stieler 氏の Atlas は一八二三年の初版以來今日世紀號たる第十版を刊行するまで年を關する事約百年である。然し今度改版された世紀號程大補修を加へられたことは未だ嘗てなかつた。殆んど全部が新しい調査の下に改作改刻されたもので舊版を使用してゐるものはほんの數葉に過ぎない。監修者は Dr. H. Haack で舊に Dr. A. Petermann の下で製圖に従事してゐた人であつて博士の歿後初めて全卷監修の任

新 著 紹 介

に當つて前後十五年間の歳月を費して漸やく完成したのが、この地圖帖である。

その製圖學上から見た結構は眞に完備にちかいものであつて、絶大なる努力の結晶であることが窺はれる。これに従事する製圖家は監修者たる H. Haack 博士を初め Sydow, Häbenicht, Vogel, Schleifer なる練達の製圖家十數名が分擔して作圖と校訂に従事してゐる、またこれを鐫刻する彫刻師も二十三名の多きに上り、中でもコーゲル、ライヘンバツヘル氏の平面彫刻の手法やクラメル、メツセルシュミット兩氏の暈滯彫刻の手際は益々研えて、地貌の表現に格段の進歩を見せてゐる。

地圖全體が委く wissenschaftlich に出来てゐることは今更ではなく、境界線や地形の正確さもまた拏々するの要はないが、地類記號 (Landsurface features) の増補、(例へば Raventield, Bogs, Terai, 等) 註記字體 (Style of Letters) の統一、都邑記號 (Classifications of Towns) を全部最新調査の下に改正されたなど殆んど舊形を止めない位に改修されてゐる、尙ほ海洋學上の新しい研究を善く取り入れて海部の深淺に、潮流等より岩礁に至るまで綿密な注意を以て補定されてゐることは實に驚く可きものがある。更に一段の便を思はしむるものは、毎圖毎にその地圖の餘白に必要な記號全部を挿入してゐることで、これは地圖に親しむ者の最も利便とするところである、多くの場合記號全部を記憶して、所要の地圖に臨むことの出来難いことは Atlas を讀むものの

等しく感ずることであつて、これを除去されたのは問題は小だが特筆すべきことと思ふ。

この世界的大作を部分的に亘つて、批評することは、容易なことではないので、たゞ概括的の紹介に止めて置くが、日本の部だけに就て披見するに第九版に於て既に *Baichin* が地方別として、府縣所在と府縣名と同一なる名稱のものは、*Underline* を以て兼稱せしめ、相違してゐるものには

Kanazawa のやうな註記のし方をして區別するなとして相當に豊富な地名を入れることに留意して居るが、世組版に於てシユライフェルやフラウデが舊區劃たる國名を使用したのはさういふ理かと思はれる。また、千島列島の *Kunien oder Tschil Is.* のやうな、遠州灘の *Totomi Bucht* 伊勢海の *Owari B.* *Jatuschiro Mere* のやうな何さはなしにそぐはないものの多くあることは、云はゞ寧ろ日本の現在の状態を如實に語つてゐるのではないかと思はれる。それは最も地理學的な、そして最も現在に即した、今日の文明を語るに足るだけの歐文日本地圖を以て、我が國が世界に紹介されてゐない證左とも見らるのである。然しまたさういつた、ましまつたもののない中でこれだけの全圖を纏めたことも偉としなければならぬと思ふ。(木崎龍尾)

雜報

○江戸川に發掘された象

七月三日千葉縣市川町に於

て江戸川の新しい橋の工事中左岸より二番目の橋臺下三十尺より象の齒、骨片等拾數箇を掘り出した。此あたり沖積層の砂、粘土で其下に洪積世の泥土層がありカキや漂木が含まれてゐた。象は此層の上部にあつたのである。市川町は沖積世になつてしばらく海であつたらしく左岸堤防下の最上部層は黄色砂で現今上總あたりの東京灣に棲む貝類さほど同じ種類が夥しくある。今日江戸川の川口より船橋千葉への海岸はかなり淡水の混入が多い所に好み棲む貝類が見られる。して見る以前は江戸川は此處に流れ注いでゐなかつたのではあるまいか。また貝と共に石器時代の土器がでた事と市川以北の臺地に貝塚の多い事と併せ考へて此貝層は石器時代の海の沈積と思はれる。東京下町の最上部貝層など同じくきわめて近く陸地に化した。有史後江戸川は利根川の本流であつた事があつたが其發達はあまり古くはないと考へられる。象は遠州佐濱に出たナツメム象(*Elephas Namadicus Naumanni* *Madykara*)に同定し得るが少しく異なる點がある。出た材料は上の左眞白齒第二番と下の白齒不完全標本二箇其他十數箇の破損した骨片で中には他獸のもの混じてゐる。最も完全なるは左上第二白齒一箇で長さ二十厘米に十四枚の齒葉と前後一づつのマロンがある。高さは前より七枚目の齒葉にて二十厘米幅